
復讐～君が死んだから～

四燠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

復讐君が死んだから

【Nコード】

N1769Q

【作者名】

四燠

【あらすじ】

君が死んだ。なら俺は……………

*残酷描写みたいになってないかもしれません。

（前書き）

最初は『復讐』を主に。

最後には恋系っぽく。

君を殺した。

あいつを殺す。

どんな手段を持っても、必ず殺してやる。

4月

君が死んだ。

被害者として、君は殺された。

理由なんて知らない。

どうだっていい。

君が死んだんだから。

俺は君を殺したヤツを知っている。
実際に目の前で殺されたのだから。

―― 君が

俺はだれにも言わない。

俺が殺してやるから。

絶対に。

地獄のそこまで落としてやる。

最大の苦痛と苦しみを与えてやる。
だから誰にも言わない。

今俺が負っている怪我は一つ。

両腕の骨の紛失。

今や全く動かない。

気にしなければ初めから無い気もする。

俺が今いる場所はベットの上ではない。

ヤツのすぐ近くだ。

病院で動くなといわれていたが、無視した。

きつと痛いんだろう。

でも、そんなの知らない。

君はもつとつらい思いをしたはずだから。

こんな痛みどうたってことはない。

それだけで動ける。

両腕はぶらんと、垂れ下がった状態でいたからきつと変わって見え
たんだろう。

すぐに気付いたようだ。

「外に来い」

そう伝えておいた。

数十分ぐらいしてヤツが来た。

笑ってやがる。

何がそんなに楽しんだ。

――ぶっ殺してやる。

数分後、俺は地面で救急車の音を聞いた。

今回受けた怪我は、

――片足の損失。

そのままだ。

聞いた話によると、かなりぎりぎりだったそうだ。

片足が丸々無くなっていたらしい。

もぎ取られたのだ。

今度は警察どもが俺のいる病室に来ようとした。

それは、担当の先生が何とかいって引き返してもらったそうだ。

今回のことがあったから「また行くのではないか」と思われたそう
だ。

余計な迷惑だ。貴様らが何をしようと俺は行くのに。

それから3日後30分だけ先生たちで会議があるそうだ。

その間に俺は外に行った。

どうやってだと？

簡単。単純明快。

昨夜付けてもらった偽足を使うのさ。
本当は動いちゃいけないんだけど行く。どこまでも。

――ぶっ殺してやる

6月

今回は一ヶ月ほど完全に動けなかった。
動きたくても動けないのだ。

あれからあの後ヤツに出会って、ぼこぼこにされて終わった。

どうやってするのかをヤツは知りたかったそうで少しスキができた。

俺は足も使えず腕も使えない。
そんな状態でやった行動は、「かみ殺す」。それだけだ。

多少の怪我は負わせたが、まだヤツは生きている。

今俺は動くことどころか食べることすらできない。

でも、俺は今ヤツの前にいる。
立っている。

どうやってここまで来たかなんて知らない。

ただ俺はヤツが俺が寝ている間に来て「手紙」をおいていったということしか知らない。

その手紙にはご丁寧に「自分のいる場所」が描かれていた。

そこが自分にとって「墓所」になることも知らずに。

―― 数分後

俺は地面に横たわっていた。

どうやらヤツは俺を殺すようだ。

目の前にある拳銃を見れば分かる。

笑ってたがる。

―― ぶっ殺してやる。

―――― ブラックアウト

ここはどこだ？
真っ暗だ。何も見えない。

ー おや？小さな光か。

ー 妖精というヤツか。俺に何のようだ。

ー なに？願いを言ってみろだと？

ー 簡単だ。ヤツを殺す。それだけだ。

ー 叶えてやろう。ただおまえのもの「すべて」をもらう。

ー 過去も未来も、すべてだ。

ー ……いいだろう。すべてをくれてやる。

そういえば妖精というヤツはたしか、「名前も知れずに独り死んで
いつて誰にも覚えられない」そんな小さな子供になるって聞いたこ
とがあるな。つまり天使と悪魔と死に神のどれかになるって、そん
なことを聞いたっけな。何にせよ今はどうでもいい話だ。

ー ー そうか、目を閉じる。ゆっくりと。

――
…………（なぜ、そんな悲しそうな顔をするんだ。）

――
おや？こいつは『アイツか』死んでるか。

――
どうやら俺の存在ごとと消えるようだな。

――
さよならか。過去も未来も。

――
おや？小さな光だ。なつかしい感じがする。

――
――
バカじゃんか

――
なんだ、こいつはいきなりけなしやがった。

――
ああ、思い出した。君は……

――
誰だっけ？ 知っていた気がする。

――
なんだ？ なぜ俺は泣いているんだ？

――
わからない。

―― さよなら。

―― …… 思い出した。 お前か。

―― ああ、 なら言っておかないとな。

―― 君のことが世界で一番――

―― なんだっけ？

―― 俺は誰だ？

―― 一樣いっておこつ。

―― 言わなきゃいけない気がする

―― 『キミが好きです』

―― 『さよなら』

— まだ、俺は……

―― ゴールデンタイム

（後書き）

この主人公は最後に何を伝えたかったのかな？

『過去と未来』

それは、

今までの記憶と、これからの記憶のこと。

これを失うことは、『自分』をなくす。

つまり、

『もともといなかった人』となること。を表したつもりです。

この主人公は『過去も未来もないから、当然記憶はなくなる。』と
いうことを知ってやった行動です。』と

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1769q/>

復讐～君が死んだから～

2011年1月18日20時42分発行